我(に)ちつとも劣らぬ郎等一人、弟(の)次郎(も)普通
格助 副詞 四段・未 打消「ず」体 格助 係助

(に)(は)すぐれたるしたたか者なり。安芸太郎、能登殿
格助 係助 下二・用 完了「たり」体 断定「なり」終

(を)見たてまつ(て)申しける(は)、「いかに猛う
格助 上一・用 補動・四段・用 四段・用 補動・四段・終 ⓚ作者→能登殿 接助 過去「けり」用 副詞

ましますとも、我ら三人取りついたらん(に)、
補動・四段・終 ⓢ安芸太郎→能登殿 接助 四段・用(イ音便) 完了「たり」未 形・ク・用(ウ音便) 仮定「む」体 接助

たとひ丈十丈の鬼なりとも、などか従へざる
断定「なり」終 格助 接助 副詞 係助 下二・未 打消「ず」体

べき。」と(て)、主従三人小舟に乗つ(て)、能登殿
推量「べし」体 格助 接助 格助 四段・用(促音便) 接助

の舟に押し並べ、「えい。」と言ひて乗り移り、
格助 格助 下二・用 四段・用 四段・用 格助

甲の鋏(しころ)をかたぶけ、太刀を抜いて一面に
格助 格助 下二・用 四段・用(イ音便) 接助 格助

討つてかかる。能登殿ちつとも騒ぎ給はず、
接助 四段・終 四段・用(促音便) 副詞 四段・用 補動・四段・未 接助 格助 ⓢ作者→能登殿 打消「ず」用

まつ先に進んだる安芸太郎が郎等を、裾を
四段・用(撥音便) 格助 完了「たり」体 格助 四段・終 格助 格助

合はせて海へどうど蹴(け)入れ給ふ。続いて寄る
下二・用 接助 格助 副詞 下二・用 四段・用(イ音便) ⓢ作者→能登殿 四段・用(促音便) 接助 四段・体

安芸太郎を弓手(ゆんで)のわきに取つてはさみ、弟の
格助 格助 格助 接助 四段・用 格助

次郎をば馬手(めて)の脇にかいはさみ、ひと締め
格助 係助 格助 格助 四段・用(イ音便)

締めて、「いざうれ、さらばおのれら、死途(しで)の山の
下二・用 接助 感動詞 接続詞 格助 格助

供せよ。」と(て)、生年二十六にて海へつつと
サ変・命 格助 接助 四段・用 格助 格助 副詞

ぞ入り給ふ。
係助 四段・用 四段・体 ⓢ作者→能登殿

---

自分に少しも劣らない家来の一人と、弟の次郎も
人並外れた(普通より優れた)剛の者である。
安芸太郎が能登殿を
見申し上げて申し上げたことには「(あなたが)ど
んなに勇猛で
ございましても、我ら三人が組みついたならば、
たとえ身長が十丈ある鬼であったとしても、どう
して従えることができない
だろうか。(いや必ず従えさせることができる。)」
と言って、主従三人で小舟に乗って、能登殿
の舟に並べて、「えい。」と言って乗り移り、
甲の鋏を傾けて、太刀を抜いて一斉に
討ちかかった。能登殿は少しも慌てなさらず、
真っ先に進んできた安芸太郎の家来を、裾と裾が合
うほど(裾が触れるほど)
引き寄せて海へどぶんと蹴り入れなさる。続いて
近寄ってきた安芸太郎を左手の脇に掴んで挟み、
弟の次郎を右手の脇に挟んで、一回締めつけて、
「さあお前ら、それではお前達は、死出の山への
供をしろ。」と言って、二十六歳で海へさっと
飛び込みなさった。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/